

令和7年度 校内研修計画

新潟市立桜が丘小学校 学びチーム

1 研修主題

話し合う活動の中で進んで学び、考えを深める子どもの育成
～子どもの学びと教師の学びの相似形を目指して～

副題について

主題にもある通り、今年度は話し合う活動を行い、考えを深める子どもを育てていきます。その過程において子どもたちだけが成長するのではなく、私たち職員も子どもたちと同じ（相似形）ように職員間で話し合い、学びを深めていきたいと思っています。主には、後述にある「授業交流会」と「自主研修会」において、互いの考えを話し合っていければと思います。

2 教育ビジョン（学びチーム）

重点的に育てたい 資質・能力	話し合うことで、根拠を探り、考えを深める力
達成目標	考えを話し合うことで、自分の考えが深まったと考える子どもが90%以上
重点的な取組	・対話活動の充実 ・振り返り活動の充実

3 昨年度の成果と課題（成果○ 課題△）

（1）新潟市生活・学習改善調査から

質 問 項 目	3 年	4 年	5 年	6 年	桜が丘小 全体	市平 均
44 授業で、自分の考えを進んで伝えています。	76.9 47.4	60.9 26.2	70.0 32.2	53.7 20.4	64.9 31.0	72.5 35.2
45 授業で、ペアやグループで話し合う活動は好きです。	87.1 75.6	82.2 56.0	88.9 67.8	83.9 39.8	85.5 59.1	85.9 55.0
48 普段の授業では、授業の終末に学習をふり返る活動を行っている。	79.4 39.7	79.8 36.9	80.0 42.2	40.9 28.0	76.8 36.5	77.7 35.7
49 普段の授業では、友達同士で話し合う活動を行っている。	87.2 52.6	92.8 47.6	95.6 55.6	94.6 59.1	92.7 53.9	91.4 55.7

* 質問項目に対する学年の割合で下段はA評価の割合を、上段はA+Bの肯定的評価を表す。

* 網掛けの数値は新潟市と比べて劣位だったもの。下線があるものは優位だったものを表す。

○授業の中で子どもたちがペアやグループで話し合ったり、振り返ったりする場を教師側が確保することができた。

○子どもたちは話し合う活動に好んで取り組むことができた。

△子どもたちは自分の考えを進んで伝えることを苦手としている。また、それは学年が上がるにつれてより強く見られた。

（2）過去の研究のまとめから

〈主に研究の内容について〉

○単元デザインの際に「目的・相手・活動・追究」の視点をもつことで、子どもが自ら活動へ向かっていった。

○話合いの型やワークシートの活用で、子どもが安心して意見を発表することができた。

△話合いが一部の子どもに偏り、考えを深める実感をもつ子どもが少なかった。

△「考えを深める」の具体的な定義が教職員にも子どもにも不確かであった。

△意識の変容を見取るために、表現する力（主に書く力）を高める必要があった。また、振り返りを習慣的に行うことができなかった。

〈主に研究の方法について〉

○単元デザインを行うことで、教職員が授業のねらいを明確にし、計画的に単元デザインを行うことができた。

○教職員による自主研修会を通じ、授業づくりへの意識が高まった。

△学年で単元デザインを行ったが、協議をする時間が十分ではなかった。

4 研修の内容

今年度も昨年度に引き続いて「訊き合う」活動に重点を置きながら、考えを深める子どもを育成していく。「訊き合う」の定義は以下の通りである。

訊き合う	課題解決のために積極的に人に尋ね、相手の考えを聴いて、自らの考えに取り入れる活動。
------	---

また、昨年度まで「考えを深めている」状態を校内では抽象的なもので終始させてしまっていた。抽象的なものでは、具体的な到達点をイメージできず、指導する側（教職員）も学ぶ側（子ども）も訊き合うことが目的となってしまった面もあった。今年度はより抽象的なものを具体的なものと変遷させ、具体的な到達点を学校全体で共有する必要がある。

田村学は、著書「カリキュラム・マネジメント入門 - 『深い学び』の授業デザイン。学びをつなぐ7つのミッション。」において、

多様な他者と対話することには、次の3つの価値が考えられます。1つは、他者への説明による情報としての知識や技能の構造化です。子供は身に付けた知識や技能を使って相手に説明して話すことで、つながりのある構造化された情報へと変容させていきます。2つは、他者からの多様な情報収集です。多様な情報が他者から供給されることで、構造化は質的に高まるものと考えられます。3つは、他者とともに新たな知を創造する場を生み出すとともに、課題解決に向けた行動化も期待できそうです。¹

と、対話する（訊き合う）ことの価値を具体的に述べている。また、同著において、「『深い学び』の実現のためには、身に付けた知識や技能を発揮したり、活用したりして関連付けることが大切になる」と、知識・技能を構造化させたり、それを質的に高めたり、新たな知を創造したりすることの重要性を述べている。

校内でも田村(2017)の提唱することを基に、「考えを深めている」状態を次のように定義したい。

考えを深めている状態	① 様々な知識や技能が結びついている状態 ② 新しい知識を得ることで、知識や技能の質が高まっている状態 ③ 新たな知を生んだり、新たな知から行動したりしている状態
------------	---

以上のことを、学習過程のプロセスに取り入れることが重要になってくる。令和7年度においては、「①様々な知識や技能が結びついている状態」に重点を置き、研究を進めたい。併せて、昨年度までの4つの意識（目的・相手・活動・追究）を基にした、教師による単元デザインも行う。また、教師が子どもの意識の変容を見取ったり、子どもが学びを自覚したりするための振り返りの場を習慣的に行えるようにしたい。

上記のことを踏まえ、以下の活動を取り入れながら研究主題に迫っていきたい。

- (1) 子どもの4つの意識を基にした単元のデザイン
- (2) 考えを訊き合える場の設定と、「訊き合う力」を高める取組
- (3) 学びを自覚する習慣的な振り返りの場の設定

4つの意識	目的：活動のゴール 相手：人 活動：コツやポイント 追究：子どもの想い
-------	-------------------------------------

5 研修方法

(1) 授業交流会の実施

- ・前期と後期（12月まで）の計2回、それぞれの期間の中で各学年の代表者1名が授業を行う。ただし、わかば学級においては、1～6組で一つの学年とする。また、級外職員は担当授業が異なっていたり、該当職員が限られていたりするため、授業は行わない。
- ・学習指導案は新潟市の授業構想カードを使用する（表）。裏には公開する授業を含めた単元デザインを記入する。その際、学習レディネスを含めたものを作成する。様式においては、学び部が後日提案する。
- ・期間中の授業は誰が参観しても良い。また、途中の入退室も可とする。ただし、自分の該当学年の授業は参加する。
- ・実施する教科は自由とする。ただし、単元デザインの観点から一定の時数がある単元、題

¹ 田村 学著，カリキュラム・マネジメント入門―「深い学び」の授業デザイン。学びをつなぐ7つのミッション。，東洋館出版社，19 - 23，2017

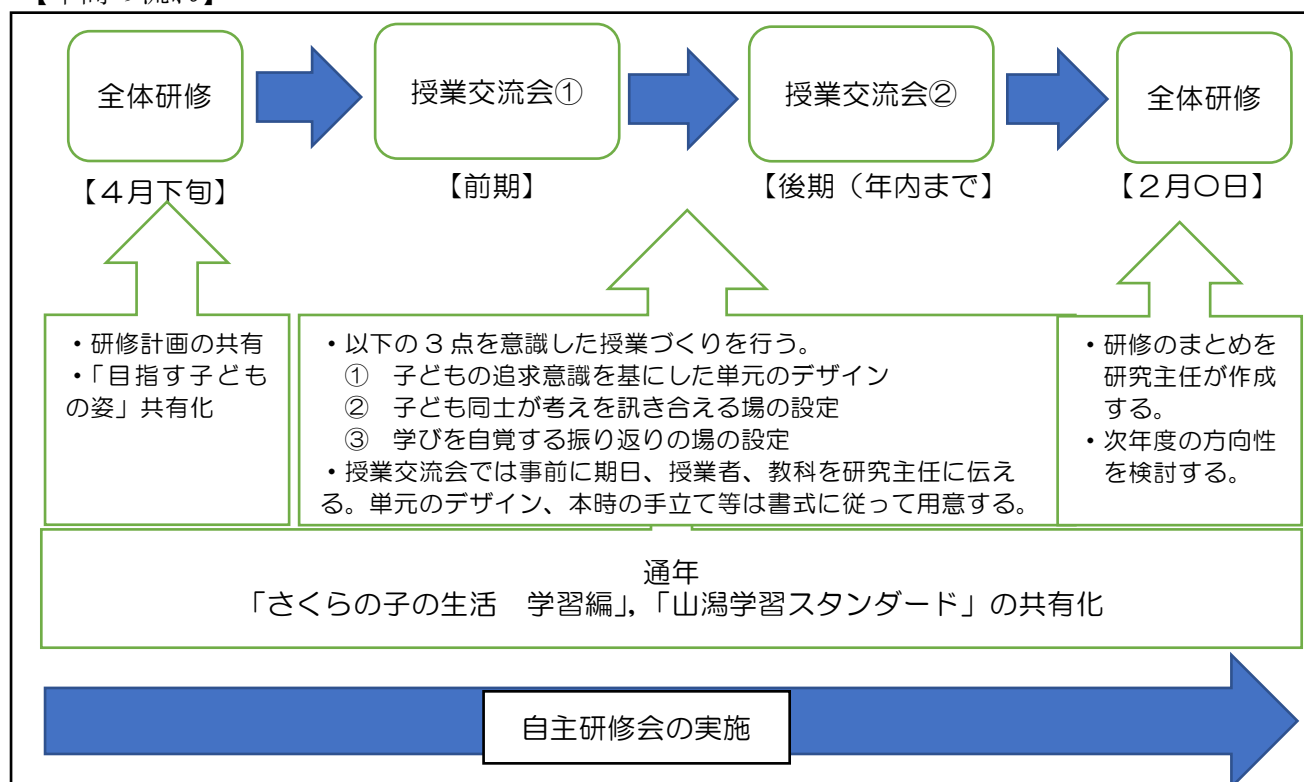
- 材を選択する。また、本時は中盤以降となるようにする。
- 授業を終えた日の放課後に授業者、参観者で 30 分間程度の座談会を設ける。
- 授業者は単元終了 2 週間後を目途に研究のまとめを作成する。まとめの様式は、作成した学習指導案に、板書の写真と成果と課題を加筆したものとする。作成次第、C4th にアップロードする。
- 前期の終わりに研究の進捗について研究主任がまとめ、後期に繋がるようにする。

(2) 自主研修会の実施

- 当校の職員が講師となり、不定期に研修会を行う。あくまでも自主的なものであるため、参加するかどうかは個人で決定する。
- 1 回の時間は質疑応答等を含め、概ね 30 分以内とする。
- 研修主題と関連がないものも可とする。以下に例を挙げる。
 - ① 実践発表（教室で行っていることをそれぞれ発表）
 - ② 得意分野を生かしたミニ講座
 - ③ ICT 活用や iPad の実践のシェア（実技講座も可）
 - ④ 明日の授業づくりや発問づくりを行う（道徳などで可能）
 - ⑤ 新潟市マイスターへの教科に関する質問タイム

など

【年間の流れ】



6 その他の取組

(1) 家庭学習の充実

- 全学年が自主学習ノートを用意する。
- 「基礎基本の定着を目指すための家庭学習」と「授業につながる家庭学習」をバランスよく充実させるために、カードを活用したり、直接表を書いたりして自学に取り組ませる。
- 学年の実態に合わせた 3 つのレベル別学習を示し、実施する。
(山潟中学校区学習スタンダード)
- 三校連携で家庭学習強調週間を設定し、家庭学習の定着を図る。

(2) iPad 活用の充実

- 家庭学習で iPad の活用を図る。